カラスの子どもはどうなるの？

協力園
別府市立
春木川幼稚園

（幼児の実態）

昨年12月に植えたチューリップの球根に、水やりをしたり、土を掛けたりしながら「卒園式には咲くかな」「沢山咲くといいね」と、花が咲くのを楽しみにしていた5歳児の子どもたち。そんな時、この地域で多数ゴミを荒らしたカラスが、花壇に植えていた球根をくわえて飛んで行ってしまいました。保育者は、農家の方に『カラス除けには、キラキラ光るＣＤが有効』と聞き、花壇に吊り下げました。その様子を見ていた子どもたちも、『かかしが鳥を追い払う』ということをＴＶのニュースで見聞きしたことを思い出し、かかしを作ることにしましたが、やりとりの中でカラスへの思いが変わっていきます。

「人の形にして！」　作ってもらいながら会話を楽しんでいる子どもたち

カラスの気持ちを考えたＢ児も、かかし作りに加わる

カラスの家族に思いを馳せ、会話が弾む子どもたち

かかしの手にしっかりと付けられたあめ玉

一月下旬、園庭では、球根をくわえて飛んでいったカラス対策のかかし作りが行われていました。女児2人は「ＣＤは、キラキラするやろー。カラスは、キラキラするのが嫌いなんや」「絶対、カラス、追い払おう！」と話しながらかかしを作っています。大切なチューリップの球根をとられた子どもたちにとって、カラスは悪者のようです。保育者も「絶対、追い払おうね」と、相づちを打ちました。

すると、Ａ児が「ねーねー、カラスに意地悪しない？カラスって、餌を持ってる人を見かけたら、手から取って食べるんで」と、自分の知っているカラスに対しての悪いイメージを友だちに話しています。保育者は、他の見方に気付かせようと、「なぜ、カラスは冬になってから来たんだろうね」と、聞いていました。すると、2人は、「カラスは、寒いのが好きなんじゃない？」「お腹が空いたんじゃないかな。かかしに（偽物の）あめ玉を持たせて、あめ玉にキラキラを貼ればいいじゃん」「いいねー。かかしに持たせたら、かかしの腕から食べられるから」と、口々に考えたことを出し合います。

保育者が「これで、チューリップを守れるね。カラスってね、頭が良くて、人間が大好きなんだって。人間が美味しいものを食べているとツンツン怒るって聞いたよ」と言うと、話を真剣に聞いていたＡ児は、「分かった。人間が怒るから、カラスも怒ってツンツンするんやな」と考えをふくらませました。保育者は、笑いながら「そしたら、カラスの悪口、言われないね」と言い、2人から求められたキラキラの材料を取りに行きました。保育者が戻ってから、2人は「服もキラキラにしよう」と、いつの間にか、かかしにキラキラするものを沢山付けることが楽しくなっているようでした。すると突然、Ａ児は「でもな、偽物のあめ玉を食べたら、カラスが死ぬよ」とつぶやきました。近くでかかし作りの様子を黙って見ていたＢ児が、「カラスは、お家に子どももいるんじゃない？死んだらかわいそうや。」と、カラスの身になって、考え始めました。Ａ児は、「じゃ、脅かして、逃げ出せるだけにする」と言いました。子どもたちのやり取りを聞いていた保育者は、「カラスの気持ちになったら、かわいそうだよね。カラスがあめ玉を持って行けないように、頑丈に止める？」と、提案しました。するとＢ児は、「そしたら、カラスが来ないやん」と残念そうに言います。Ｂ児の思いを汲んだ保育者は、「カラスが来ないように作っていたけど、カラスの気持ちを考えていたら、来て欲しくなったんだね」と話しました。その後、Ｂ児は「私も、仲間になっていい？」と、かかし作りの仲間になりました。

「カラスがくわえられないくらいの大きなあめ玉にしようか」「あめ玉を紐で繋いでおこうか」「カラスは本物と思ってびっくりするよね」等話しながら、かかし作りを楽しみました。結局、3人はあめ玉をしっかりと止めることにしたようです。3人のやりとりでは、大切なチューリップを守りつつ、カラスの命も大切にする、大きなあめ玉をしっかり持った「かかし」ができています。

友だちと互いの思いや考えを伝え、受け止めたり、認め合ったりして、言葉で伝え合う喜びを味わう経験を積んでいくことで、人と心を通わせながら活動を楽しめるようになることが期待できます。

言葉による伝え合いを育む環境構成のポイント

- 考えを受け止められる安心感のある環境。
- 農家の人の話やTVニュースを話題にする環境。
- 違う立場の相手（悪者になっているカラス、カラスがかわいそうと言うＢ児）のことを考えようとする保育者。
- カラスが自分たちの植えた球根を食べてしまったという心を動かされる共通の体験。
- 言葉を通して、自分の知らない世界（カラスの家族、カラスが偽物のあめ玉を取った場面）にイメージを広げ想像する体験。
- 子どもの興味のあることを話題提供する保育者。

事例から見られる10の育ち

自然との関わり・生命尊重

Ａ児たちは、保育者の問いかけに、季節の変化や『お腹を空かせている』かもしれないと、カラスのことを考えようとした。

また、Ｂ児の「親が死んだら子どもが可哀想」という言葉に心を動かされ、自分の家族と重ねて考えたと思われる。

保育者や友だちの考えを言葉で理解し、カラスの生活に思いを寄せて、命について考えるきっかけになったのではないか。

事例から見られる10の育ち

言葉による伝え合い

農家の人の話やＴＶニュースを見聞きした経験からカラスを追い払う作戦を話し合っていた子どもたち。大切なチューリップの花壇を荒らしたカラスは子どもにとっては悪者であり、カラスをこらしめたい気持ちが強くなってきた。保育者から問いかけにもＡ児に変容はなかったが、Ｂ児の『カラスの家族』の話を聞くことで気持ちが変わった。

また、考えの違いでかかし作りの仲間入りを渋っていたＢ児は思いを受け止められたことで、自分の考えを出しながら友だちと一緒に遊ぶようになった。

保育者に受け止められながら、言葉で友だちと共感し合い、心を通わせていった。更に、自分の考えを変化させていき、遊びを楽しめるようになっていったのではないか。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「１０の姿」

道徳性・規範意識の芽生え

言葉による伝え合い

自然との関わり・生命尊重

先生や友だちと心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。